琉球大学学術リポジトリ

イモ作りと養豚

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農家政学部
	公開日: 2011-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 日越, 国吉
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20650

イモ作りと養豚

戦前戦後を通じての最大の飼養頭数 16万5千頭余（1961年6月30日現在、経済局畜産課調べ）に 増殖した豚は住民の需要（14万頭内外）をオーバーした為、豚価の大暴落を来たし、農家を不安に陥し入れ、市町村当局は試験屠殺をして価格を算定、業者が儲け過ぎると非難し、業者は詳細な計算を出してこれに反叙を加えると言う具合でいがみ合ったが、香港に輸出することが出来て幾分価格の持ち直りを見たのでこの争いも一応納った形となった。しかし、なお豚価は不安定で満足出来ない状態にあった所から、豚価安定法の早期立法が要請され1962年の立法院議会で立法成立を見たが、細目の規程も未制定のまま、今度は豚の飼養頭数の急激な減少を来し逆に豚価が暴騰したため、豚価安定法も棚上げの形である。

豚価安定法の内容からすると、ある限界以下に豚価が下落すれば、政府が買上げ豚肉を保管し、これを加工又は輸出して豚価の安定を図らねばならない。（この事業は団体を指定して行なはせることが出来る）

この法によって農家は豚価の暴落から救われ得るが、豚価が暴騰して豚肉価格が高騰して庶民の生活が困難になる事態に対しての具体的救済策は示されてない。

豚価の激しい変動は、常に農家の養豚経営上の大きな悩みであることは沖縄も本土も変りない所から、本土では一足先の第39議会中の1961年10月31日に畜産物の価格安定等に関する法律が議会を通過立法され、同年 12 月7日には畜産振興事業団が発足した。1962年2月には畜産審議会の決定した肉豚の最低価格を割る事態が生じたので、2月7日から肉豚の購買が始まり、同年 6 月までには11万 8 百余頭が買上げられたため、豚価の暴落を食い止め得たのである。 買上げの総額は500万弗以上に上ったそうである。しかし、その後の状況は肉豚の出廻り不良から漸次豚価が高騰し庶民の食生活を脅かす上限の価格になって来たので、保管されていた豚肉を売り出して豚肉価格の高騰を阻止し庶民の食生活の安定を守る策が採られた。

ここで沖縄並に本土の畜産が戦前と戦後を比較しどう変ったかを見てみよう。

第 1 表の沖縄の畜産を見ると、戦前に比し増しているのは、乳牛で2割1歩、豚が1歩増し（但し1961年6月末日の経済局畜産課の調査16万5千頭とする場合は126%で 2 割 6 歩増したことになる）。鶏は約 2 倍半となるが役肉牛は約半分に、馬は約 3 分の 1 に減り、山羊は 4 割止りであって、家畜単位に直して見ると戦前に比し戦後は約33,440頭少ないのである。（家畜単位は牛 1 、馬 1 、豚 5 山羊10、鶏100を以て一家畜単位とする）

本土は、馬が農業の機械化により 3 分の 1 に減っているが、役肉牛は 1 割増して居り、山羊が約 2 倍になり、鶏が 7 割 5 分増し、乳牛は約 4 倍に近く、豚の如きは 4 倍以上にそれぞれ増殖している。

戦後本土の歩みは、増殖計画を上廻る増産を示し、再三計画の建直しが行なわれた程堅実な進みを見せて来たさらに10年後の昭和 4 6 年（1 9 7 1 年）には役肉用牛を253万頭、乳牛293万頭、（馬は50万頭に減す） 豚739万頭、山羊50万頭、鶏を 1 億 5 千万羽にそれぞれ増殖し、さらに資質の良い家畜に改良する計画を樹立しようとしている。この改良を豚に例をとってみるなら、飼料の利用率が高く、より少ない日数で肉豚として出荷出来、肩幅

第1表　沖縄における戦前・戦後の家畜頭数比較　（経済局畜産課調べ）

	役肉用牛	乳　用　牛	馬	豚	山　　羊	鶏
戦前－1 9 3 6 年	30,040頭	600頭	46,824頭	129,544頭	155,198頭	389,918羽
戦後－1 9 6 2 年	16,030	729	17,637	131,069	67,397	840,147
戦前を100とした場合1962年との比率	53%	121%	37%	101%	43%	241%

（6ページにつづく）

（3ページのつづき）

よりも尻幅の広い形のものにして枝肉と上肉の歩留りを高くし、産仔数も多いような豚に改良して行く計画を樹てようとしている。

素晴らしい計画になるが、従来の実績からして実現性は強いと見てよろしい。計画は上記の様であるが、現状はどうか。戦前の本土の養豚は10万頭以上を飼養する県は沖縄以外になかったのであるが、昨年2月1日現在で茨城県は34万頭を突破し、13万頭以上の県は、鹿児島、北海道、愛知、埼玉、千葉、群馬、宮崎と10県に及ぶ。なお一戸当りの飼養頭数の最高は愛知県の7.7頭で 大方の県が一戸3頭以上になっている。

この一戸当り飼養頭数の増加は、農林省並に各県の指導機関による家畜の飼養経済調査の結果が、多頭数飼育でなければ総ての畜産経営は赤字であると言う結論が出たため、協業養豚並に多頭数飼育の為の経営方法、資金の調達、畜舎の設計、飼料計画、飼料の配合、家畜の衛生面、出荷方法、その他に対し適切な指導と政策が採られたことと農民の意欲の盛り上りの結果である。

斯く本土畜産の戦後の延びは素晴らしいのに、戦前日本一の養豚県であった沖縄が延び悩んでいる原因は何処にあるのか。当局はキビ、パインのブームに押されて家畜の主要飼料であるイモ作付面積の縮少に原因する飼料不足の為であると説明している。しからばイモは経済的にキビ、パインに全々太刀打ち出来ないのであろうか。模範農場の平野技師は「沖縄農業と その振興に関する二、三の知見」（1963年2月6日）と言う論文に10アール当り、イモの生産を17,45kg(坪9.7斤）で、年2回取れば、10アール当り 夏植10,020kg、春植6,890kg、株出6,130kgを生産したものを1kg当り1仙5厘に、パインは1作5カ年の合計10アール当り6,000kgを生産 1kg当り6仙に売れた場合これを1カ年間の土地生産力に直すとそれぞれ夏植100弗、春植103弗、株出し92弗、パインは72弗となるがイモは1kg2仙7厘（1斤当り1仙6厘）にして94弗になり、夏植、春植のキビと大差なく、株出し、あるいはパインよりも有利であると結論している。（数字は沖縄の実績）

イモ作には一般に関心が少なく、キビの後作にイモを植付ける場合等は無肥料で栽培する傾向にあるが、これをキビ作程度に厩肥を基肥とし、追肥に金肥の2、3俵も使用するなら、10アール当り倍の 360kg（坪20斤）は楽に採れるであろう。7年前の1956年頃沖縄群島政府の依頼で薩岡に乳牛購買に出かけた時、農家に立寄ってイモの10アール当りの収量を聞いて見た。戦前日本全国の

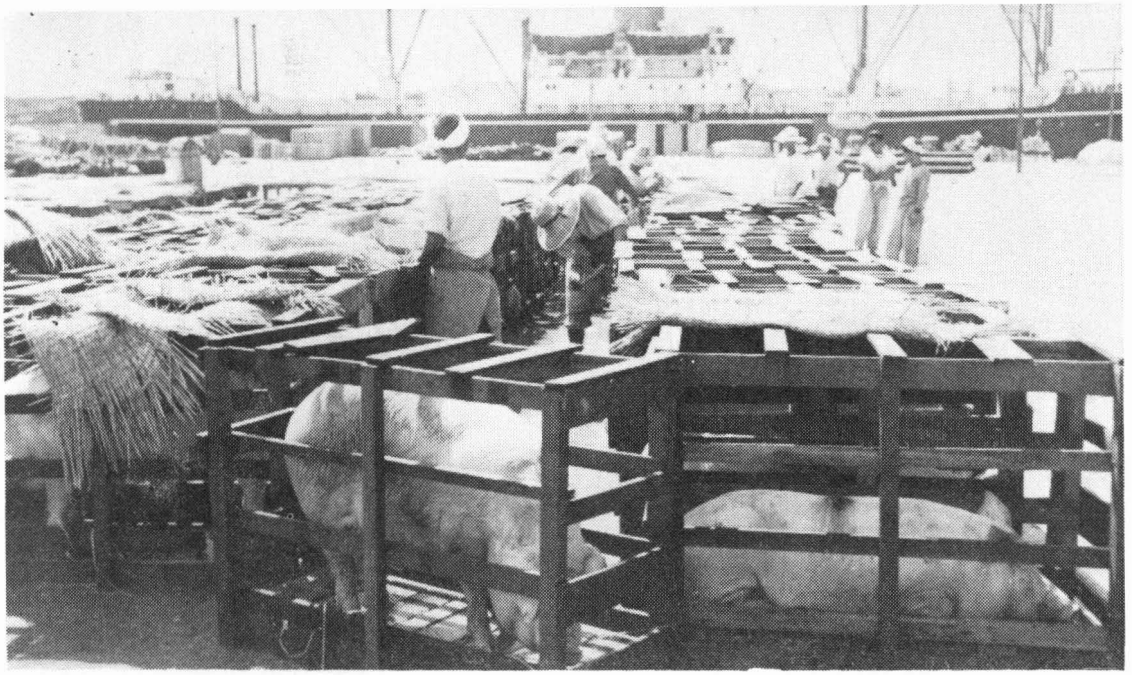
第2表 日本における戦前戦後の家畜頭数比較 （農林省畜産要覧並に畜産便り）

	役肉用牛	乳用牛	馬	豚	山羊	鶏
戦前の最高頭羽数	2,138,430頭	264,834頭	1,410,764頭	932,335頭	251,973頭	51,322,438羽
1962年2月1日現在	2,332,170	1,001,690	546,700	4,032,740	498,580	90,006,000
戦前の最高を100とした場合 1962年との比率	109%	378%	31%	432%	197%	175%

第3表 反当飼料生産比較 沖縄統計 昭和10年より昭和14年までの5カ年平均反当収量より算定

飼料名	反当収量	1石の重量	反当重量	百分中成分		反当生産	
				可消化蛋白質	澱粉価	可消化蛋白質	澱粉価
水稲	1.637石	39貫	63.8貫	6.6%	83.2%	4.2貫	53.07貫
陸稲	0.760	38	27.8	6.6	83.2	1.8	23.12
大麦	0.583	29	16.9	6.1	73.9	1.0	12.48
小麦	0.457	36	16.5	9.4	76.0	1.6	12.54
裸麦	0.490	37	18.1	6.8	77.0	1.2	13.93
大豆	0.691	34	23.5	29.0	73.9	6.8	17.36
イモ	495貫	—	495.0	0.9	22.0	4.4	108.90

（註） 飼料用畑作物として最適なものは甘藷である。



かっては香港輸出をした郷土の豚（一九六〇年四月那覇港にて）

第4表　本土畜産事業団の豚枝肉買上価格　（1Kg当り）

最高・最低別	年度	大宮市場 横浜市 名古屋市	大阪市	広島市	福岡市
最高価格	1962年3月まで	340円（56.6仙）	305円（50.8仙）	300円（50.0仙）	300円（50.0仙）
	1962年4月以降	同上	同上	同上	同上
最低価格	1962年3月まで	245円（40.8仙）	220円（36.6仙）	215円（36.0仙）	210円（35.0仙）
	1962年4月以降	250円（41.6仙）	225円（37.5仙）	220円（36.6仙）	220円（36.6仙）

備考　1.　枝肉とは放血、脱毛し、頭、内臓、蹄等を除去したもの
　　但し本土では腎臓並に腎臓周囲の脂肪はそのまま付けて置く
　　2.　（　）内は600g（1斤）当りの価格を示す。

反当りイモの収量は375貫（坪7斤8合）（沖縄は戦前500貫平均であった）と気憶していたので「400貫は採れるか」と聞いたら「800貫平均採れる」との返事であった。「それは篤農家の話じゃないか」と反問したら「篤農家は1000貫以上だ」と明瞭な答えであった。少々オーバーな言い方としても沖縄が後れていることは確かである。

気候条件は遥かによろしい沖縄としては静岡以上であるべきことは当然と言ってよかろう。

イモ作は他作に比し労力が要求されるから嫌だとも言われるそうだが、在来の鍬を振り上げ、打ち下ろす腰の痛い農業は今時は流行らない。すべからく楽農の線で行くべきで、耕起、畦立、収穫には犁でなければトラクターを使い機械化農業で行く。10アールでも一切収穫をやり、ひどい泥でない限り洗う必要もなくそのまま動力イモ摺機（共同購入）にかけ、直ちにサイローに詰め込む方式を採れば煮る為の燃料と労力が節約出来る。イモを夏作にし後作に馬鈴薯作かその他への利用を考えるなら農業経営を素晴らしく有利にすることが出来るであろう。

勿論豚の飼料とする場合、イモは大変蛋白質に乏しい飼料であるから、大豆粕、ふすま、魚粉等を補給し、カルシウムその他のミネラル並びにビタミンも考慮に入れなければならない。豚用の配合飼料も市販されているから利用するに便利であろう。

資金面では開発金融公庫も畜産関係への貸出しを計画しているから大いに利用すべきであろう。

養豚も2、3頭飼いでは有利性がないことは本土も沖縄も同様であろうから毎月か隔月に数頭の仔豚を購入、飼育して6カ月以内には肉豚として出荷することにすれば、毎月か隔月に収入がある。繁殖豚も毎月か隔月に1腹か2腹の仔豚を売り出し得るとなれば、豚価の変動が如何に激しかろうとも年間を通ずるなら痛みは感じないであろう。

最近（4月上旬）首里で肉豚が600グラム40仙余りで売れたと聞いたが、それはそれとして香港出荷も可能な線まで生産原価を落せる様に不断の研究が必要である。

イモが家畜飼料として大変有利な作物であることを証明する資料として第3表を見てもらい度い。

農業経営は災害の多い沖縄では片寄り過ぎない様考えられなければならないと思う。　（日越国吉）